



再処理工場は能力不足で、新たな再処理工場を建設しなければなりません。さらには増殖黒陽燃料工場も必要ですから、サイクル確立までのハードルは高すぎます。

我が国では理想として再処理を国内で出来るよ希望を持っておりませんが、未だ出来ていないので、フランスに依頼して再処理しております。

再処理に出して、プルトニウムとウラン、さらに高レベル放射性廃棄物も同時に送り返されます。

往復の輸送の手段は、船舶によりますが、核爆弾を製造出来るプルトニウムをフランスと日本の間を往復するので洋上でシ - ジャックの怖れは十分にあり、護衛として海上保安庁で護衛専用大型巡視船を建造し、通常の倍くらいの航海距離を偽装として航走し、フランス出港してから、大西洋を南下し、アフリカ南端喜望峰を更に南下、暴風圏近くを東進しオ - ストラリヤの南沖合を経て、ニュ - ジランドの東側を北上するとい偽装航路をとって無事帰港しましたが、航海監視衛星がある現在では何の意味もありません。

その打開方法として「プルサ - マル方式」が計画され、福島第一原発3号機がこのプルサ - マルでも行っており、幾多の障害を乗り越えてなんとか出来るのではないかと、という見通しになった時点での今回の事故でした。

地元である福島県内でも反対運動が起きたり、佐藤知事との間でも意見の違いがあったり、MQX 燃料（再処理で得られた酸化ウランを混ぜて造った燃料）の製品トラブルや欠陥があるなど、重大な事態が重なり、高速増殖炉、プルサ - マル計画自体が延び延びになっているのが実情です。

一方、海外での再処理によって出た高レベル放射性廃棄物はガラスに混ぜて固め「ガラス個化体」としてから、日本に送り返され、それを六ヶ所村で一時保管するのですが、最終的な処理場、あるいは貯蔵所はまだありません。これからどんどん増える、使用済燃料は、現在でも万単位のガラス固化体があり、処理に困り、モンゴルに保管場所を求めましたが、断られるのが当然で、自国内で処理施設を造るのが当然であり、でなければ核サイクルは夢でしかありません。